音声情報を用いた自発的感情推論の検討(3)

不一致感情語追加記述との比較

○小森めぐみ¹・村田光二²

(¹一橋大学社会学研究科博士後期課程・²一橋大学社会学研究科)

キーワード: 感情推論、状況、音声誤再認課題

Spontaneous emotion inference from voice information

Megumi KOMORI, and Koji Murata

(¹Hitotsubashi University Graduate School of Social Sciences)

Key words: emotion inference situation false recognition paradigm using voice

目 的

他者の感情を理解する手がかりとして、その人がおかれた状況についての情報があげられる。たとえば「大切にしていたペットの小鳥が死んでしまった」という状況を聞けば、その人が悲しいことは容易に推測できるだろう。

小森・村田(in press, 2008a, 2008b)は自発的特性推論(Uleman, Saribay & Gonzalez, 2008)の手法を援用し、状況を手がかりとした感情推論が自発的に (i.e. 教示や本人の意図的な努力なしに) 生起することを示した。例えば誤再認課題を改訂した小森・村田(2008b)では、特定の感情を生起させる状況を描いた文を読上げ、後に読上げを文字で呈示して再認させた。その結果、参加者は感情語が追加された誤再認文を「読上げ文と同じ」と判断した。状況文を初めに呈示した際には感情を推論することを奨励する教示は行わなかった。それにもかかわらず感情語に対する誤再認が生じたことは、人々が自発的感情推論に従事したことを示唆する。

しかし、小森・村田(2008b)で見られた感情語に対する誤再認量は、読上げ文の一部と関連する意味語に対する誤再認量を上回っていなかった。この場合状況の符号化時に自発的感情推論が生じたのか、それとも再認時に初めて感情が推論されたのか区別できないという問題があった。

そこで本研究では再認時の意味語追加条件を廃止し、読上げ状況からは推論できない感情語(不一致感情語)を追加する条件を設け、読上げ状況から推論可能な感情語追加条件(一致感情語)と比較した。状況呈示時に自発的感情推論が生じていれば、推論結果にあわない不一致感情語追加条件は容易に誤りであると判断されるだろう。

方 法

実験参加者: 大学生 71 名(男性 34 名女性 37 名、平均年齢 19.7 歳)。**実験計画:** 追加感情語(被験者間: 一致/不一致)の 1 要因被験者間計画。**手続:** 実験は授業時間の一部を使用して実施された。参加者には条件ごとに異なるパターンの質問紙が配られ、実験目的は「音声情報の処理を調べる」ことであると伝えられた。教示や音声呈示はパソコンを使用した。

まず参加者は特定の感情を生起させる状況を説明した文章の読み上げを聞き、状況の想像しやすさを質問紙に回答した(読上フェイズ)。読み上げは中立記述 4、感情喚起記述 8 (ターゲット記述)、感情喚起記述+一致感情語 2、感情喚起記述+不一致感情語 2 (フィラー記述) の合計 16 記述であった。感情語にはイライラ(怒り)とオロオロ(不安)を用いた。

その後参加者はディストラクション課題に 3 分間解答してから、質問紙上で感情喚起記述に感情語を追加した誤再認記述をランダムに呈示され、それぞれが先程の読み上げと同じであったかどうかを 6 件法(1. 絶対違う~6. 絶対同じ)で回答した(再認フェイズ)。誤再認記述は感情喚起記述に一致する感情語が追加されたもの(一致条件)と不一致の感情語が追加されたものがあつた(不一致条件)。読み上げの時点

で感情語が含まれていた 4 つの記述も同様に呈示された。

最後に参加者は実験や読み上げに集中していたかどうかを尋ねる質問に回答し、ディブリーフィングを受けた。

結 果

留学生 1 名を除外し、70 名に対して分析を行った。

仮説の検討: 条件ごとにターゲット記述の再認確信度の得点の平均値を求め、追加感情語を独立変数とする t 検定を実施した。その結果、一致条件の再認確信度得点($M=3.70$, $SD=0.98$)は不一致条件($M=2.40$, $SD=0.94$)よりも有意に再認確信度が高かった($t(69)=10.99$, $p<.001$, Fig.1)。よって仮説は支持された。

感情語が入っていた記述の分析: 補足分析として、フィラー記述(読み上げの時点で感情語が含まれていた記述)に対する再認確信度得点についても分析を行った。フィラー記述は全参加者で同じものを使用したので、感情語(一致/不一致)を被験者内要因の独立変数とする対応のある t 検定を実施した。その結果、一致語を含んでいた記述($M=4.69$, $SD=0.97$)の再認確信度は不一致語を含んでいた記述($M=3.56$, $SD=1.21$)を有意に上回った($t(69)=6.27$, $p<.001$, Fig.2)。

Fig1. 一致/不一致ごとの再認確信度

Fig2. 一致/不一致ごとのフィラー再認確信度

考 察

本研究では、音声誤再認課題を用いて状況からの感情推論が自発的に生起するかを検討した。その結果、ターゲット記述に追加された感情語が一致の方が、不一致の場合よりも誤って「読上げと同じ」と判断されやすかった。この結果は、人物の感情が明記されていなくても、その人の置かれた状況から対応する感情が推論されることを示している。

一方、読上フェイズで既に感情語を含んでいたフィラー記述についても、一致記述は不一致記述よりも再認確信度が高かった。この結果からは、参加者が読上げフェイズで自発的に状況から感情を推論したのではなく、再認フェイズになって初めて記述と追加された感情語のあてはまりの良さを元に推論を行い、判断を下したとも考えられる。

ただし、本研究ではフィラー記述の数や内容について統制が不十分であった。フィラーについても厳密な統制を行い、検討を重ねる必要があるだろう。

引用文献

小森・村田(in press). 実験社会心理学研究. 小森・村田(2008a) 感情心理学研究, 16(3), Pp.239. 小森・村田(2008b) 日心 72 回大会発表原稿集, Pp.98. Uleman, Saribay & Gonzalez, (2008). *Annual Review of Psychology*, 59, 329-360.